



好学愛知 自律敬愛 質実剛健

鶴丸イ言

鹿児島県立鶴丸高等学校

〒890-8502 鹿児島市薬師二丁目1番1号

TEL 099-251-7387 FAX 099-255-3433

http://www.edupref.kagoshima.jp/sh/Tsurumaru/top.html

5月の行事予定

5月		食	休	教員相互授業参観期間
1	火	新体カテスト(2年)	○	
2	水	新体カテスト(1年) 実力考査時間割発表	○	
3	④	憲法記念日	×	
4	⑤	みどりの日	×	
5	⑥	こどもの日 3年学研模試	×	
6	⑦	3年学研模試	×	
7	月	学年朝会 1年クレペリン検査	○	
8	火		○	
9	水	実力考査(1日目) PTA総会	×	
10	木	実力考査(2日目)	○	
11	金	学校安全の日	○	
12	⑧		×	
13	⑨		×	
14	月	スクールカウンセリング	○	
15	火		○	
16	水	立会演説会・生徒総会 45分6限授業	○	
17	木	PTA総会欠席者会 眼科検診	○	
18	金	避難訓練	○	
19	⑩		×	
20	⑪		×	
21	月	全校朝会 集団読書(3年)	○	
22	火	PTA研修部会	○	
23	水		○	
24	木		○	
25	金	中掃除	○	
26	⑫	2・3年駿台模試 バスケットボール県総体会場	×	
27	⑬	バスケットボール県総体会場	×	
28	月	集団読書(2年) スクールカウンセリング 中間考査時間割発表	○	
29	火		○	
30	水	交通安全教室 PTA総務部・学年代表者会	○	
31	木		○	

今年も中庭の標の花が咲いた。昭和三十一年(一九六四)年四月に、創立七十周年記念式典が行われた頃も同じであった。「標咲く、学風ここに酔乎たり」、この句は一中・鶴丸で教諭・教頭として二十年在籍しておられた西村一意先生の句である。戦後、男女共学となった鶴丸高校は、加治屋町の一高女の校舎で産声をあげた。戦争による空襲で、木造の一中の校舎をはじめ市内の殆どの建物が焼けたが、当時、一高女の校舎は市内には数棟しかない鉄筋コンクリート造りであったため、焼け残ったのである。

加治屋町校舎で、新生鶴丸の歴史が刻まれていったが、十三年経った昭和三十一年、戦後の第一次ベビーブームを反映して、高校入学予定者の人数が急増することになるため、鹿児島市に新しく県立高校を設置することが発表された。その候補地として一中の跡地、現在の本校の場所が、教育委員会から発表されると、本校のPTAの方々などから、「一中の跡地は鶴丸の運動場として体育の授業や放課後の部活動に使用していること、そしてそこに他の高校が出来れば、一中の後身という鶴丸の系譜が切れてしまいかねない」などの懸念が表明された。

こうして新設高校問題は一中跡地を巡って世論を巻き込んで紛糾したが、結局、教育委員会は「新設高校の校舎には、加治屋町校舎を当て、鶴丸高校は薬師町の一中跡地(現在の本校の場所)に新築移転させ」と発表し、騒動は鎮静化していった。

この間も、鶴丸生は軽はずみな言動をする者は居らず、落ち着いて、常に変わりなくノートを広げ、辞書をひもとき、授業も決して中断されることはなかったという。昭和三十三年三月二十六日、加治屋町校舎から校長を先頭に国旗、校旗、その後職員・生徒が続く形で行進し薬師町の新校舎に入った。当時の久保校長は引越越し

業の前に生徒に対して「物が引越すのではない、精神が越すのだ」と強調された。

四月七日、薬師町新校舎で初めての始業式・入学式を中庭で挙行。九日から授業が始まった。その日、ひばりが鳴いていた。

西村先生は後にこう記されている。「鶴丸は本当に良い所だと思う。なんといっても人が良い。生徒も先生も学問を愛する。戦争時代にも黙って勉強した。新しい時代になっても必ずしも新しいものに走らない。広い真理と自由のみが存し、実力だけがものを言わして動かない。いかなる時にも授業をやめない。この酔乎として酔なる中正の学風こそ、結局、鶴丸の芯であって、それが内に向かって、外に向かって、ものが内に向かって、外に向かっても、ものを言っているように思っている。」

中庭の標の花はかつて一中の庭に咲いたものであった。

入学式(四月九日)。第七十二期生が高校生活のスタートを切りました。



三月に卒業を迎え、残念ながら現役では難関大学に届かず、来年度捲土重来を期すことになった生徒が話してくれた。「受験に対応するだけの知識は身につけたつもりでしたが、いざ答案を作ろうとした時にうまく表現できませんでした。にわか知識では太刀打ちできないことを受験を通して再認識できました。」

特に難関大学の受験で求められる力は、知識を詰め込むだけの受験テクニックだけではないことが、彼のコメントを通してよく分かる。一つの事象についていかにストーリーが描けるかが大切なのだろう。求められているのは、いわゆる「総合知」である。ではなぜ「総合知」なのだろうか。

東大名誉教授の原島博氏は、「なぜ総合知なのだろう。科学の対象が複雑になってきたからだ。例えば、環境問題や社会の安全・安心など、最近の課題は、従来の専門知の組み合わせでは解決できない。かつての天文学のように変数が少ないときは専門知だけでよかった。変数が多くなると、総合知が必要とされる」と述べている。

また医療の分野でも今後医師不足と患者の高齢化が重なり、自分の専門以外の多疾患を抱える患者を診なければならぬという状況になってくるそうだ。つまり、今後求められる医師像は、昔のような「総合診療医」であり「総合力のある専門医」ということになるらしい。

社会に出ると答えが一つではない問題に取り組まなければならない場面が多く出てくることになる。一つ一つの事象が複雑に絡み合い、学校で習ってきたそれぞれの解法だけでは即座に解決できず、教科やジャンルを超えて自分で解法を求めていかなければならない。従来大学でも自分が何を研究するかテーマを設定し、その仮説を立て、それを科学的に検証することが求められる。つまり、自分で考え、判断し、表現する力が必要になってくる。

第七十二期生の皆さん、入学おめでとう。皆さんの学年は大学入試センター試験に代わり、「大学入学共通テスト」が始まる

時代が求める「総合知」とは 第一学年主任 徳留 健作

研究し、オンコセルカ症の特効薬イベルメクチンを開発、ノーベル生理学・医学賞を受賞された大村智教授は「私の仕事は微生物の力を借りて、難しいことをやっていたわけではない」と述べている。イベルメクチンは全世界で延べ十億人以上に無償提供されているのである。

皆さんには、自分がわくわくする、面白いと思える事柄に敏感に反応して、自分でどんどん探究していく力を身につけて欲しいと考えている。そのためにも、多くのその分野の先駆者の話を聞き、書かれた本を読まなければならぬ。一見受験とはあまり関係のないような気もするが、そんな探究活動こそが社会が求める「総合知」を身につける最善の方法だと思ふ。

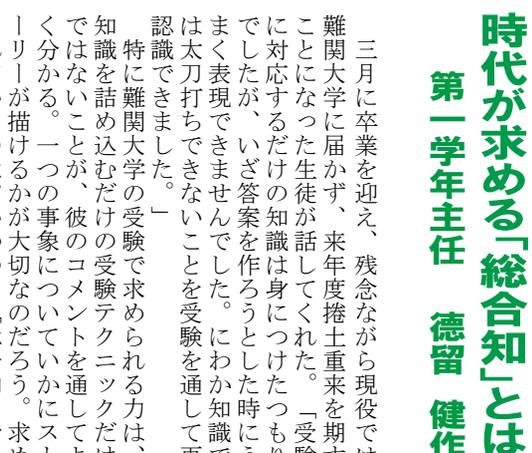
これから始まる不可逆の三年間を自分の人生の根っこを育てるつもりで、自分に限界を作らず、いろいろなことに果敢にチャレンジし、大きく成長することを望んでいる。

その改革の目的は、知識・技能を十分有しているかの評価も行いつつ、思考力・判断力・表現力に関する評価も行うことである。まさに、大学や社会が求めている力である。そこで、国語と数学では従来のマークシート式問題に加え記述式問題も導入され、英語も「読む」「聞く」「話す」「書く」の四技能を評価するために、資格・検定試験が活用されると正式に発表されている。

これだけ入試が大きく変わると、三年後自分果たして大丈夫なのだろうかと不安になりそうだが、焦る必要はない。鶴丸高校の授業で求められることも同じである。一つの問題でも考える要素が多く、簡単に答えが出ることは少ない。そこで自分の五感をフル稼働して考えることが求められる。

本来勉強とは大学に合格するためにするものではないだろう。自分が興味のあるものを時には幅広く、疑問に思ったことはさらに深く掘り下げて研究するものだと思ふ。そして、その研究が最終的に世の中の役に立つことがある。四十五年余りにわたり微生物を

対面式(4月10日)の様子。新入生代表の18R本坊ももさんが「机上の学問にとどまらない様々な学びから、今の不安に打ち勝っていきたい」と高校生活に向けての抱負を述べた。



四月二〇日、第四十八回 甲南・鶴丸スポーツ交歓会(通称 甲鶴戦)が県立鴨池運動公園で開催された。今年のキャッチフレーズは、35Rの満永桃子さんが作成した「Palette(パレット)」であった。どの会場でも両校生徒が熱戦を繰り広げ、今年も大いに盛り上がる大会となった。結果は、甲南に総合優勝を譲ることとなったが、どの競技も白熱し、キャッチフレーズの意図する「いろいろな出会いと交流がもたらす可能性」を生み出したと思われ。

閉会式の様子。それぞれの競技で多くの保護者や卒業生から激励をいただきました。

甲鶴戦 Palette

刹那にける青春の光

対面式(4月10日)の様子。新入生代表の18R本坊ももさんが「机上の学問にとどまらない様々な学びから、今の不安に打ち勝っていきたい」と高校生活に向けての抱負を述べた。